

# 和歌山県立医科大学附属病院



## 日本の医療を変える気概で 富士山のようなすそ野の広い医師を育てる

マッチングの順位を上げ続ける和歌山県立医科大学附属病院は、いまや全国から注目を浴びる存在だ。研修の満足度も高く、研修医の約4割は口コミなどで他大学からやってくる。研修医を惹きつけるマグネット研修病院のノウハウを探ろうと、最近ではマスコミの取材や他病院からの視察も多い。指導医や研修医のインタビューを軸に、その魅力に迫る。

### 屋根瓦方式の指導で プライマリケアもしっかり学べる

ドクターヘリの管制室に救急隊から連絡が入る。本日3件目の出動要請だ。県西部の有田郡から搬送されてきた患者は脳卒中の疑い。救急外来でCT検査を行い、脳梗塞を確認するとすぐにt-PAの投与が開始された。

「脳梗塞は、発症から3時間以内が勝負。県内にはt-PAによる治療ができる病院が数カ所あるが、交通の便の悪い郡部の患者さんの場合、当院からドクターヘリを飛ばした方が早いことも多いのです」と、脳外科医で卒後臨床研修センター長の上野雅巳先生は説明する。

和歌山県立医科大学附属病院にドクターヘリが導入されたのは2003年。2008年には月平均32.1人、



↑ドクターヘリにより患者が緊急搬送された

←搬送された患者の治療方針を研修医とともに練る

年平均385人がドクターヘリで救急外来に搬送される。救急外来全体の患者数は、年平均2万人にも上る。

「県民にとっては、当院が最後の砦。県民の健康を支えているという自負があります」と上野先生。

1次から3次救急までを受け入れる同院は、高度な医療を行う大学病院でありながら、市民病院としての役割も同時に担う。救急外来ではウォークインの患者さんも多く、common diseaseの症例も豊富だ。

「できるかぎりファーストタッチは研修医に、というのが当院の方針です。もちろん一人ではなく、1年目の研修医には2年目や3年目の研修医を指導につける。彼らに判断できないときは中堅医や指導医にすぐ相談できる体制をとっています」と上野先生。

現在、救急外来には1年目研修医のほかに2年目研修医二人、後期研修医二人と指導医が在籍する。こうした屋根瓦方式の指導体制は同院の自慢の一つであり、マンパワーが豊富な大学病院ならではのものだ。

患者さんの訴えと身体所見から、診断の道筋を立てて治療方針を探るというプライマリケアの基本が十分に学べ、入院した患者さんについてはカンファレンスなどでその後の様子が分かる。一人の患者さんの経過を最初からきちんと追えることが、同院が研修医の人氣を集める理由の一つである。



卒後臨床研修センター長  
上野 雅巳 先生

▼研修医のローテーション例

		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
A先生	1年次	内科			外科			内科			救急		
	2年次	選択			神経精神科	産科婦人科	小児科	地域保健医療	選択				
B先生	1年次	内科		内科		内科		協力型臨床研修病院(外科)			救急		
	2年次	選択						地域保健医療	小児科	産科婦人科	神経精神科		

### 研修医がプログラムをつくる 自由度の高い研修システム

同院の研修プログラム最大の特徴は、自由度の高さにある。研修医は3カ月ごとに先輩研修医のアドバイスを受けながら次の研修先を検討する。このような決め方ができる理由は、まずローテーション式研修の長い歴史があること、そして各科の研修医受け入れ能力が高いことだ。「いつ、何人研修医が来ても十分に対応できる教育力がある」と上野先生は言い切る。

研修医を惹きつける自由度の高いプログラム。それがもたらすものを、院長の畑端義雄先生は次のように話す。「研修医の自主性を尊重することでモチベーションや責任感が向上し、意欲的な研修につながります。また研修医同士のディスカッションが盛んになり、チームワークも育まれる。やる気のある研修医ほど満足度が高いようです」

研修医自身が個々につくりあげるといことは、研修医の数だけ異なったプログラムがあるということだが、同院にはそれを受け入れるだけの肥沃な土壌がある。充実した研修設備、教育力、病院スタッフ全員の研修医教育への意識の高さなど、あげればきりが無い。それらに加え、研修医の意見に積極的に耳を傾ける姿勢が重要だと畑端先生は語る。「より良い教育をと思えば、自ずと研修医の意見を聞き、それを生かそうという方向に向かいます。当院



院長 畑端 義雄 先生

の研修体制やプログラムは、そうした改善の積み重ねによってできたものです」

研修医の声が発端となった改善は、病院の運営にも及ぶ。

例えば、救急外来の医師の編成が外科中心で内科が手薄だという意見が研修医から上がったため、第1～

4内科から一人ずつ救急外来に入るようになった。また、かつては救急外来から入院する患者さんの病床は各科に分散していたが、それでは回診に無駄な時間がかかるという指摘があり、救急外来用の病床を一カ所にまとめた。

「組織の風通しを良くし、病院と研修医の信頼関係を深めることに長年心を砕いてきました。そのためか、研修医も病院をより良くしようという意識が高く、すばらしい提案をしてくれます」

そう話す畑端先生も、少人数での昼食会など研修医と話す機会を積極的に設けている。

### 研修医と指導医の距離の近さから 生まれる確かな成長

指導医と研修医との距離を測ったら、同院はおそらく全国でもトップレベルの近さだろう。屋根瓦方式の指導体制が十二分に機能しているのも、研修医・若手医師・中堅医師・指導医の間に信頼と親しみやすさがあるためだ。研修医側にはいつでも相談できるという



指導医 循環器内科  
北端 宏規 先生

安心感があり、指導する側はそれにしっかり応えている。

指導医の一人、循環器内科の北端宏規先生は、「私たちは、いつ誰に聞いてもらってもいいというスタンスです。研修医も分からないことは早く解決しようと積極的に指導を求めてくる。みんなで解決策を探すという空気が病院全体にあり、他科への相談も気軽にできるのは、研修医にとって大きなメリットでしょう」と語る。

前述の通り、同院ではプライマリケアの段階から患者さんを診ることが出来る。北端先生は、診断のついていない患者さんを診察・診断して、帰宅か専門診療科への受診か入院かを決める過程を数多く経験することが重要だと話す。

「自分の判断に対して、本当にこれで大丈夫かと常に問いかけながら進めていく慎重さが医師には必要です。少しでも心配なときは別の医師に意見を求め、より確実な判断に結びつけるという経験を積んでほしい」と北端先生。

同院で1年間研修すれば、たいいていのことには対応できるようになる。その成長の確かさは、畑塾先生、上野先生、各指導医とも異論はない。だが、だからこそ慎重さを身に付けてほしいのだと北端先生は言う。

「診断や治療においては強気で攻めなければならない場面もあります。また医師も人間ですから失敗もあるのが現実です。しかし慎重さを忘れなければ、失敗を極力避け、完全を目指すことができます」

知識や技術だけでなく、医師としての姿勢も研修中に学ぶべき重要な要素。「精一杯何かを身に付けて成長してやろうという気持ちで研修に臨んでほしい」。北端先生のこの言葉に象徴される指導医の熱意が研修医に伝わるから、両者の距離は離れることがないのだろう。

## プライマリケア能力と 専門性を兼ね備えた医師の育成が目標

同院のマッチ数は、新医師臨床研修制度が開始された2003年度が41名、その後徐々に増加し、2008



2年目研修医が1年目研修医に点滴のポイントをレクチャー

年度は58名に。そのうち4割近くを他大学出身者が占めている。

地方の公立大学が研修医獲得に苦慮する中、この躍進を支えているのは、「自由度の高いプログラム、プライマリケア能力の習得、教育力の高さと思われた環境」だと上野先生は分析する。研修医の話聞いても、これらが評価されていることは明白だ。

上野先生は言う。「目指すは日本一の研修病院。研修医にとって良いこと、病院にとって良いことはほとんど取り入れます。それが結果的には患者さんの利益につながり、地域との信頼も深まる。私たちは、和歌山から日本の医療を変えるのだという気概で

やっています」

同院は、研修医のさまざまな要望に応えられるように多様な選択肢を用意している。

例えば地域医療に関しては、県内11カ所の地方病院と連携を結び、研修医が希望する病院で1～3カ月の研修が受けられるようにしている。そうした病院の中には、地域ぐるみで研修医を育てようという意識が高いところもあり、研修医たちは大学病院では決して学べないことをたくさん吸収してくると言う。

一方で、海外研修にも積極的に研修医を送り出す。初期研修終了後、希望者は米国のMD Anderson Cancer Centerをはじめとする海外の病院で、カンファレンスや回診の見学、現地の研修医たちとのディスカッションなどを体験できる（渡航費・宿泊費病院負担）。「研修医がやりたいと思うことは可能な限り実現させたい。それが意欲や成長につながっていきますから」と言う上野先生。

環境づくりの一環として、同院はアメニティの充実にも力を注ぐ。今年4月、同院の最上階にオープンしたレストランでは、和歌浦湾、マリナシティ、桜で名高い紀三井寺を一望しながら、冷凍食品は一切使わ

ないなど素材や味にこだわった料理を手頃な値段で楽しめる。

「“病院のレストラン”というイメージを覆したかった。患者さんや付き添いの家族、病院スタッフに癒しの場所を提供することが目的です」と上野先生は説明する。

次々と新しいことに取り組む同院だが、「医師とはどうあるべきか」という考えにおいては揺るがない考えを持っている。それは「富士山のような医師」だ。

上野先生は、「富士のすそ野のように広いプライマリケア能力と、頂上のように高い専門性を併せ持つことで、はじめて私たちは患者さんの期待に応えることができます。これだけは誰にも負けないという専門性は自信の源となり、武器ともなるものなので、ぜひ身に付けてほしい」と力を込める。

畑塾先生は、同院の研修の考え方を総括して次のように語ってくれた。「研修期間を含め医師の教育期間は8年間。そういう意識で、私たちは研修医教育に取り組んでいます」

医師としての第一歩であり、将来にわたっての土台を築く研修の在り方を改めて考えさせてくれる言葉だ。

## 研修医インタビュー

中村憲太先生  
(2年目研修医・山口大学卒)

当院を研修先を選んだ一番の理由は、自由度の高いプログラムです。いろいろな科を回っていくうちに興味の対象が変わることもあります。融通がきくプログラムだと、その後の研修を自分の興味に合わせて作りあげていけるので、意欲的に取り組めます。

救急の3カ月間は、大変だったけれどやりがいもありました。最初は何もできなかった自分が、少しは医師らしく患者さんを診られるようになったことが嬉しい。今は整形外科に興味を持っていて、整形の道に進もうかなと思っています。

上野先生がとても気さくで、研修室の雰囲気も明るいので、楽しく研修をしています。



谷崎優子先生  
(後期研修医(3年目)・和歌山県立医科大学卒)

5、6年生のときにいろいろな病院に見学に行き、研修先は大学病院が良いと感じました。医師の数が多いのでその分多様な考え方に触れ、広い視野を獲得できると思ったからです。連携病院での地域医療なども自分なりに組み合わせることができ、当院なら2年間一貫した研修が受けられることが魅力です。

手厚い指導体制という傘の下できちんとした教育を受けたい。そのためにはプログラムの自由度が高いことで、



研修期間の2年間を有意義に過ごすのが良い。そう判断しました。

初期研修を終えて今年産婦人科に入局。常に向上心を持って産婦人科医としてキャリアを積んでいきたいと考えています。

## 研修環境がさらに充実! 新研修センター 間もなく完成

今年10月、同院に地上5階の新研修センターが誕生する。1階の地域医療推進室を除けば、あとはすべて研修のための設備だ。

2階の臨床技能研修センター(スキルスラボ)には最新の人体シミュレータがそろい、心臓マッサージ、人工呼吸、気管挿管、腰椎穿刺、中心静脈カテーテル留置、末梢血管確保、乳房触診などを疑似体験できる。3階の卒業臨床研修センターは研修医専用の部屋。一人ひとりに机とロッカーが準備されている。4階のOSCE(客観的臨床技能研修)室には、これまで身につけた臨床実技を客観的に評価する設備が整う。OSCEは医師国家試験への導入が検討されていることもあり、注目度の高い設備である。



5階は後期臨床医専用の研修室と、多目的に使える研修室。研修設備が一カ所にまとまり、同院の研修環境はいつそうレベルアップする。

## ・ DATA ・

和歌山県立医科大学附属病院  
〒641-8510  
和歌山市紀三井寺 811-1  
TEL 073-447-2300  
<http://www.wakayama-med.ac.jp>

### ▶ 診療科

糖尿病・内分泌代謝内科、消化器内科、呼吸器・アレルギー内科、循環器内科、血液内科、神経内科、小児科、神経精神科、皮膚科、放射線科、心臓血管外科・呼吸器外科・乳腺外科、消化器外科・内分泌・小児外科、脳神経外科、整形外科、リハビリテーション科、麻酔科、産科・婦人科、泌尿器科、耳鼻咽喉科、眼科、歯科口腔外科、救急集中治療部

▶ 病床数 800床

▶ マッチング情報

2008年度募集定員 63名  
同マッチング結果 58名